

二国間交流事業 共同研究報告書

令和4年4月4日

独立行政法人日本学術振興会理事長 殿

[代表者所属機関・部局]
埼玉大学・人文社会科学研究科
[職・氏名]
教授・野中 進
[課題番号]
JPJSBP1 20198806

1. 事業名 相手国: 韓国 (振興会対応機関: NRF) との共同研究

2. 研究課題名

(和文) 社会変動の時代における文化変容のダイナミクス: 20-21 世紀の転換期のロシア文化

(英文) Dynamics of cultural processes in the periods of social transformations: Russian culture at the turning points of the 20th and 21st centuries

3. 共同研究全実施期間 2019 年 4 月 1 日 ~ 2022 年 3 月 31 日 (3 年 0 ヶ月)

4. 相手国代表者(所属機関・職・氏名【全て英文】)

Yonsei University, Assistant professor, Nam Hye Hyun

5. 委託費総額(返還額を除く)

本事業により執行した委託費総額		2,262,000 円
内訳	1年度目執行経費	1,122,000 円
	2年度目執行経費	1,140,000 円
	3年度目執行経費	- 円

6. 共同研究全実施期間を通じた参加者数(代表者を含む)

日本側参加者等	5 名
相手国側参加者等	5 名

* 参加者リスト(様式 B1(1))に表示される合計数を転記してください(途中で不参加となった方も含め、全ての期間で参加した通算の参加者数となります)。

7. 派遣・受入実績

	派遣		受入
	相手国	第三国	
1 年度目	5	1	5(0)
2 年度目	0	0	0(0)
3 年度目	0	0	0(0)
4 年度目	-	-	-()

* 派遣・受入実績(様式 B1(3))に表示される合計数を転記してください。

派遣: 本委託費を使用した日本側参加者等の相手国及び相手国以外への渡航実績(延べ人数)。

受入: 相手国側参加者等の来日実績(延べ人数)。カッコ内は本委託費で滞在費等を負担した内数。

8. 研究交流実績の概要・成果等

(1)研究交流実績概要(全期間を通じた研究交流の目的・研究交流計画の実施状況等)

本プロジェクトは「社会変動の時代における文化変容のダイナミクス：20-21 世紀の転換期のロシア文化」という研究テーマの下、各参加者がそれぞれ具体的な研究対象とアプローチを定め、議論と情報交換を重ねつつ、日韓のロシア文学・文化研究者の研究交流を図ることを目標とした。2020年以降のコロナ禍によって大幅なスケジュール・内容変更を余儀なくされたが、概ね、以下のような研究交流実績を残すことができた：

(1) 2019 年 6 月 29-30 日に日本で第 10 回東アジア・スラヴ・ユーラシア国際学会（於東京大学）が開かれたのに合わせ、韓国側参加者 5 名が全員来日し、情報共有・討論を行った（28 日）。また上述国際学会で複数のパネルを組織した（29、30 日）。

また、2019 年 9 月、古宮路子は、ゲルツェン教育大学が中心となってペテルブルグで開催された国際会議「ロシアのロゴス 2：モダニズム——コントロールの境界」に参加し、研究報告を行った。

(2) 2020 年 2 月 1, 2 日、大邱市の慶北大学校で共同セミナーを開催し、研究チーム構成員各々の研究成果についての中間報告、討論を行った。日韓の研究交流に資するため、討論者や特別報告者として慶北大学校の若手研究者・大学院生の参加も積極的に促した。

(3) 前項セミナーの後、世界的コロナ禍が起り、2020 年度に予定していたロシアで開催される学会での共同発表を 2021 年に延期したが、残念ながらこれも実現に至らなかった。そのため期間後半（2020、2021 年度）は資料分析を主とし、2021 年 9 月に欧文（ロシア語、日本語）の共同論集を出版した：Gretchko V., Nam H., Nonaka S., Kim S. (eds.), *Russian Culture on the Crossroads of History. Far East, Close Russia*, v. 4. Belgrade, Seoul, Saitama: Logos, 2021. 428 p.

(2)学術的価値(本研究交流により得られた新たな知見や概念の展開等、学術的成果)

本研究プロジェクトでは、現代ロシア文学・文化研究において様々な新しいアプローチと主題を試みた。その最大の成果が上記の国際論集である。この論集は、日本と韓国のみならず、台湾、ロシア、ウクライナ、ハンガリー、フランスの研究者（全 29 名、論文 28 本）が参加する大部なものになった。紙媒体だけでなく、電子版をペテルブルグ大学文学部哲学史科のホームページにアップを依頼し、国際的閲覧可能性を増した：

<https://philhist.spbu.ru/images/books/DVBR42021.pdf>

また、本書の出版はロシアでも紹介された：

- ・アルタイ国立大学 HP (<https://www.asu.ru/news/42371/>)
- ・ロシアの人文専門書を紹介する著名なブログ (<https://philologist.livejournal.com/12100576.html>)

(3)相手国との交流(両国の研究者が協力して学術交流することによって得られた成果)

本研究交流では中堅・若手の参加を奨励した。これによりお互いに知己を得て、今後の研究交流や共同研究の土台となるものと期待される。

同じ東アジアとはいえ、日本と韓国では学風に多少の違いが認められるので、自身の研究スタンスの自覚に役立ったところが大きい。

また、台湾や極東ロシアの研究者にもセミナーや論集への参加を積極的に促したことで、日韓を中心とするアジア地域のロシア文学・文化研究のコミュニティ形成が期待される点も、付言しておきたい。

(4)社会的貢献(社会の基盤となる文化の継承と発展、社会生活の質の改善、現代的諸問題の克服と解決に資する等の社会的貢献はどのようにあったか)

日韓を中心としたロシア文学・文化研究の成果を国際的に発信するということで、ロシアやウクライナ、その他の国々に「東アジアのロシア文学・文化研究」の存在を知らしめたことで、これらの国々との今後の交流・相互理解に資することが期待される。

一例を挙げると、日本側代表(野中進)は上記国際論集に参加したウクライナの研究者(オリガ・ニコレンコ)と教育・研究面での交流(コロナ禍でのオンライン学生セミナーの開催など)を続けており、今回のウクライナの戦争でも現地のように日本メディアで紹介した。

このように、人文学の研究交流が元となって、草の根的ではあれ、国際交流と相互理解に育っている。

(5)若手研究者養成への貢献(若手研究者養成への取り組み、成果)

国際会議での共同発表、セミナーでの討論、共同論集の編集などを通して、本研究プロジェクトに関わった若手研究者はお互いの存在と能力を意識するようになった。これを梃子に今後も研究・人的交流が続くことが期待される。

ロシア文学・文化研究の場合、ロシアや欧米の研究者との交流が主となりがちだが、隣国同士・同地域内の研究交流も重要かつ生産的であることを認識してもらえたと思う。

(6)将来発展可能性(本研究交流事業を実施したことにより、今後どのような発展の可能性が認められるか)

日韓が中心となり、東アジアにロシア文学・文化研究の中心を作ることが求められる。ロシアとウクライナの政治的分断は両国の文化・学術交流に致命的な影響を及ぼすだろう。東アジアが中心になって新しい研究交流のかたちを築くことが可能であり、必要である。

(7)その他(上記(2)～(6)以外に得られた成果があれば記述してください)

例:大学間協定の締結、他事業への展開、受賞、産業財産権の出願・取得など

特になし。